

テーマ 個性が輝く 未来が広がる 学悠館

定時制課程



本年度の目指す生徒の姿

- 夢や希望を抱いて未来を描き、その実現にチャレンジする生徒
- 自分の能力に気づき、主体的・自律的な学びに真摯に取り組む生徒
- 多様な価値観を尊重して他者と協同し、共に成長する生徒

取組の視点

- よりよく生きるための基盤となる健やかな心と身体を育てる。
- 生徒の強みや可能性を引き出し、主体的・自律的な行動につなげる。
- 自己受容、他者信頼、相互貢献、所属感を醸成する。



努力点	学校自己評価				学校関係者評価	
	本年度の具体的方策	評価指標	評価結果	次年度以降への改善策		
安全・安心な学校生活の提供	安全安心サポート調査の回数を増やし、生徒の状況把握の頻度を高め、いじめなどの問題行動が起りにくい学校づくりをすすめる。	本校の教育活動に関するアンケート(生徒対象)の安全安心な学校生活に関する項目の評価が3.2以上A、3.2未満2.8以上B、2.8未満C(昨年度4件法3.17)	B 3.17	B	生徒へのあいさつや声掛け、相談体制の充実によって、いっそう教職員との信頼関係を深めることができる。ますますこの拡充を図ってほしい。一方、事故対応の研修は、実施の機会に限度がある。年度ごとにテーマを設定し、複数年かけてさまざまな種類の事故に対応できるように研修計画を作ると良い。	
	生徒の安全確保のために教員向けの研修を行い、緊急の対応が必要になった際の対応方法について理解を深め、実践力を高める。	事後アンケートを実施し、自信を持って対応することができたと答えた教員が70%以上A、自信を持って対応することができる、何とか対応することができたと答えた教員の合計が70%以上B、70%未満C	B 自信を持って34% 何とか対応 59%			問題行動が起りにくい学校づくりを目指すため、生徒への声掛けや校内外巡回の重要性の共通理解を深め、全教員による生徒指導体制を強化する。 教員が自信を持って緊急の対応ができるようにするため、これまでと同様に研修機会を設けて経験を積むとともに、様々な種類の事故の対応に関する研修を計画する。
主体的・対話的な深い学びの研究と実践	学びの目標と評価の一体化のために、観点別評価に関して校内研修等の機会を用いて、昨年度の実施状況や外部研修の紹介等の積極的な情報共有を進める。	実情に即した校内研修の実施と関連情報の発信、共有をすることができたA、どちらかを実施できたB、どちらも不十分だったC	B	B	観点別評価に関する具体的な改善策と校内研修の充実を期待したい。出席に関する改善策の趣旨は何ら問題ない。ぜひとも生徒の学習意欲の向上を図ってほしい。なお、具体的な方策を設定する際には、指標と結果の関連性が明確になるように、数値による目標に変更するのが良い。	
	出席(1/7・1/5)指導を的確に実施し、欠課の要因等の自己理解を深めるとともに、早い段階での欠課の増加防止に努め、履修認定のみにとどまる生徒を減少させる。	履修認定のみにとどまる生徒が大きく減少したA、減少傾向が見られたB、変化が見られなかったC(R4:延べ31科目)	B			校内研修等により、評価に関する情報共有は十分に行うことができたが、指導と評価の一体化に課題が残った。観点別評価を指導改善につなげるための研修を実施する。 授業への出席率のさらなる向上のため、授業アンケートや観点別評価をもとに授業改善に取り組み、生徒の学習意欲の向上を図る。
キャリア発達・進路実現を促す活動	「総合的な探究の時間」を通して生徒の主体的なキャリア発達・進路実現をサポートする。進路部と担任の連携により、個の生徒の強みや弱みに対応した進路指導に取り組む。	進路の方向性が決まらなかった生徒(未定)の割合(卒業生人数に対する)が、15%未満A、15%以上25%未満B、25%以上C(昨年度25.6%)	C 32.0%	B	進路意識の啓発と、これに並行した実践的な就業体験や就業見学の機会を拡充していくことは、卒業時の進路未定・在家の生徒数の減少に向けた有効な方策になる。また、サポートと連携したジョブ・チャレンジも積極的に進めていくと良い。ただし、進学を第一に考える生徒も少なくない。就職に関する指導ばかりに偏ることのないように留意してほしい。	
	インターンシップ、ジョブシャドウイング、看護体験、介護体験、寺子屋みらい、体験学習、ジョブチャレンジなどを通して、生徒の勤労観や職業観の育成や自己理解の促進につなげる。	教員にアンケートを実施し、生徒の実態に即した適切な諸活動に参加させた割合で、勤労観や職業観の育成につながったと答えた教員が、60%以上A、60%未満40%以上B、40%未満C	A 88.9%			キャリア発達をさらに促すと同時に就職内定率を向上させるため、2・3年次就職希望者へのインターンシップを充実させる。また、進路未定者に対してより手厚い支援を行う。 全教員協力のもと、体験活動のPRを実施し、参加人数を増やす(今年度参加生徒のべ76名)。また、進路ガイダンスや総合的な探究の時間に体験活動を組み込むことを検討する。
開かれた学校、地域との連携・協働	全職員で魅力ある広報記事の作成にあたり、ICTを活用して本校の魅力を情報発信する。	魅力ある記事の作成に携わった教員が、60%以上A、60%未満40%以上B、40%未満C(昨年度54%・27名/50名)	B 12月末45本 23名/51名 45%	B	情報発信に可能な限り努めてほしい。保護者アンケートの回収率の向上には、工夫が必要であろう。Web回答を求めれば、指定IDによる登録に加え、面談などで保護者が来校した際にも念を押してほしい。一方、行事への保護者参加率の向上に関する評価指標は、対前年比の設定で良い。	
	学悠館だよりやHP、一斉メールを活用して学校やPTAの魅力ある活動情報を保護者に周知し、保護者などの行事への参加率向上を目指す。	PTA総会、出監察の保護者の参加者数の向上率が前年比で平均20%以上A、20%未満10%以上B、10%未満C (R4:PTA総会39名、出監察440名)	B PTA総会41名 出監察533名 19.8%増			情報発信をより充実させるため、行事計画時にHPの記事作成係を設ける。また、ICT利活用の推進と魅力発信のため、教員1人1記事作成を計画し、月ごとに担当を割り振る。 保護者の各行事への参加率を向上させるため、担当だけでなく他の係と連携して有意義な事業内容を企画し、効果的な広報活動に取り組む。
心身の健やかな成長	掲示物や保健だより、授業を通して健康や体力の保持増進について指導を行い、生徒の健康意識の向上を図る。	各種検診後の要精密検査受診者の受診率が50%以上A、50%未満25%以上B、25%未満C(昨年度15%)	C 18%	C	要精密検査受診者に対して、疾患を放置することによるデメリットを伝えたり、受診できない理由を調査してみたりする必要はある。あわせて、周知方法の工夫を試み、受診率の向上につなげてほしい。生徒・保護者が抱える課題は、SCやSSWとの連携、支援体制の再構築を通じ、この軽減や解決を図ってほしい。学校行事では、他者と関わったり、他者の話に耳を傾けたりする機会が多い。このことは、生徒の精神的な成長を促すのに有効である。今後も、生徒自身が主体的に参加し、この成長を実感できるような教育活動に期待したい。	
	生徒や保護者が抱える課題について、生徒情報交換会・ケース会議、SCおよびSSWとの連携を通して、組織的な支援体制を継続することで諸問題の解消に努める。	支援を受けた生徒の担任に事後アンケートを実施し、問題点が緩和され学校生活を送ることができている割合が、80%以上A、80%未満70%以上B、70%未満C	B 75%			生徒・保護者の健康意識の向上を図るため、啓発活動のさらなる充実を図るとともに、要精密検査受診者に対する文書配付やメール配信、保護者面談の実施等、周知方法を工夫する。 SCやSSWとの連携により、生徒の不安軽減につながった。支援が必要な生徒をそれらに繋げていく組織的な校内体制を再構築する。
	生徒が、主体的に部活動や学校行事等にかかわることができるように企画・運営し、自分の強みや可能性に気付かせ、健やかな心と体を育てる。	行事ごとや年度末に生徒アンケートを実施し、主体的に活動・行事等に関わり心身の成長を感じることができたと答えた割合が、80%以上A、80%未満70%以上B、70%未満C	C 57%			主体的に行事に関わった生徒は多いが、自らの成長を実感できていない。行事等の中で、キャリアパスサポートの活用を工夫し、成長を意識できるようにする。
豊かな人間性・社会性の育成	LHRや学校行事を通して、多様な価値観を尊重して他者と協力したり、仲間と信頼関係を築けるようにする。	行事ごとや年度末に生徒アンケートを実施し、特別活動の参加を通して仲間と協力したり信頼することができたと答えた割合が、80%以上A、80%未満70%以上B、70%以下C	C 61%	B	仲間との協力や信頼関係の構築につながるような特別活動が展開されている。生徒アンケートでは、具体例を示し、自己評価が高まるような評価基準を設けると良い。一方、ルール・マナーの意識に関する生徒の自己評価は高評価であり、頼もしい限りだ。より実践的な場面での活用を促す工夫をすると、なおさら良い。	
	情報教育講話や薬物乱用防止講話等を通して、ルールやマナーの意義を伝え、生徒の自己指導力を高める。	事後アンケート(生徒対象)におけるルール・マナー意識の肯定的な意見が70%以上A、70%未満50%以上B、50%未満C	A 96%			他者と協力して様々な活動ができる生徒は増えている。各行事の目的を意識させることで、さらにその人数を増やし、信頼関係構築に繋げる。 生徒の自己指導力を高めるため、講話は効果的であったが、日々の生活に生かされていない。授業やSHRなどあらゆる場面で全教員がルール・マナーの意義を伝える。